

特定非営利活動法人 日本免疫学会
平成 24 年度 Tadamitsu Kishimoto International Travel Award
研究発表報告書

申請者氏名	高村 史記	会員番号	0031799
申請者の所属・職名	近畿大学医学部免疫学教室・助教		
出席会議名	Keystone Symposia (Viral Immunity and Host Gene Influence)		
発表論文タイトル	CD69 controls a balance between S1P ⁺ and CXCL16-induced chemotaxes during the process of memory CD8 ⁺ T cell recruitment to the lung airways		

実施結果:

2012年3月21日から26日まで、アメリカ・キーストンにて開催された Keystone Symposia (Viral Immunity and Host Gene Influence)に参加し、呼吸器感染により誘導されたメモリーCD8T細胞が肺気道へ帰巢するメカニズムに関する研究成果を発表した(23日に口頭発表、24日にポスター発表)。Viral Immunity は Immunologic Memory と交互に隔年で開催されてきた、主要な感染免疫研究者が一堂に集う魅力的な学会であり、更に今回は HIV Vaccine とのジョイント開催ということもあって、マウスレトロウイルス感染モデルと今回の発表に用いたマウスインフルエンザウイルス感染モデルを用いた、将来的なワクチン応用を目的としたメモリーCD8T細胞免疫応答解析に携わる自分にとって最高のアピール、そして情報交換の場となった。

本学会参加の最大の動機となったのが、留学時代の指導教官であった Trudeau Institute 所長 David Woodland の引退である(Keystone Symposia の Chief Scientific Officer に就任)。彼のこれまでの研究を引き継ぐ研究者の一人として、彼の最後の発表に合わせて自身の存在をアピールすることはまさに最高の舞台であり、それに相応しい内容の研究成果をこのタイミングで応募できたこと、またそれが口頭発表に取り上げられより一層注目を集めることができたことで、この学会への参加は非常に価値のあるものとなった。自分の発表の後に行われた Woodland の発表でもその成果および存在を再度強調してもらうという付加効果もあり、自身のアピールという目的は想定以上に達成されたと思われる。

また、(留学時のテーマに固執することなく)独立した研究者として認められるべく新たに立案中の研究構想に関して、個人的な対話を通じて世界での進行状況を探るという第二の目的に関しても一定の成果を得ることができた(現段階でその研究がすでに取り組みされている可能性は少ない)。この対話を通じて、インフルエンザ分野では Stephen Turner、レトロウイルス分野では Kim Hasenkrug や Mario Santiago、そして S1P 分野では Mehrdad Matloubian らと個人的な親睦を深めることができ、共同研究もしくは研究資材の供与に関して非常に建設的な関係を結ぶことができたことも、この学会に参加する事で得られた最大の成果の一つであるといえる。他にも得られた同世代研究者との出会いは、将来的な研究の遂行に少なからず影響を及ぼすものと思われる。

この度、Tadamitsu Kishimoto International Travel Award の受賞者として、その助成目的に相応しい成果を残してきたことをここに報告すると共に、岸本忠三先生、推薦者である中山俊憲先生、そして選考頂いた日本免疫学会理事諸先生方に深く感謝致します。

注) 本報告書は手書きでなく、ワープロを使用して作成して下さい。